



Title	<書評>『内田義彦の世界—1913-1989 生命・芸術そして学問』藤原書店編集部編 2014. 3. 30藤原書店発行
Author(s)	多田, 一夫
Citation	年報人間科学. 2016, 37, p. 195-199
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54588
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈書評〉

『内田義彦の世界—1913—1989 生命・芸術そして学問』

藤原書店編集部編

2014.3. 藤原書店発行

多田 一夫

はじめに

経済学者で経済学史と社会思想史を専門とした内田義彦の生誕100年を記念して出版された本書は、尊敬する研究者を偲んで後継者たちが論文等を持ち寄り、論文集として故人に捧げるものとは少し異なっている。内田と交流があった多彩な人々や親族が登場し、藤原書店編集部が編者となっていることなどが特徴となっている。

内田は1913年に愛知県に生まれ、東京帝国大学で経済学を学んだ後、1946年専修大学の准教授になり、経済学史等を担当していたが、83年に専修大学を退職、89年呼吸不全で死去した。アダム・スミスの研究者として高い評価を得ており、市民社会の思想家と言われていた。

今年(2015年)が内田の没後25年にあたっている中、内田の思想(人となりと作品＝業績をトータルに捉えたもの)が本書でどのように提示されているか、どこまで読者に理解されるようになっているか、見てみたい。

5部構成になっている本書は、山田鋭夫(九州産業大学経済学部教授 理論経済学・経済学史)が「内田義彦「生きる」を問い深めて」という題で内田を紹介する文章からはじまる。次に「今、なぜ内田義彦か」(第1部)と「内田義彦を語る」(第2部)は、内田の魅力を語った座談会の記録と各界人が綴った内田の著書への感想文、交流を回想した文章でなっている。「内田義彦が語る」(第3部)では幼少期から主著『経済学の生誕』に至るまで、内田自身が語った摘録と、八つの文章(「神話の克服へ」、「読むこと きくこと」、「読んでわかるということ」、「社会科学の文章」、「他の生物とちがう人間の特殊性」、「資本主義に独特なダイナミズム」、「教育批判への視座」)が置かれている。さらに、内田純一(内田の子息で建築意匠家)の文章と内田の「主要作品解説(山田鋭夫)」、「略年譜(1913—2013)」、「著作目録」が付けられている。

構成に見られるように、内田の人となりと作品＝業績を46人(投稿者や座談などの出席者として、経済学関係の研究者のほか、作家や文学研究者、哲学や社会思想史の研究者、芸術家、政治学者、自然科学者等)が追慕、評価していることと、内田自から人となりと研究内容を語らせていることが、本書の内容になっている。経済学に限らず、文学や芸術、自然科学などの専門家が内田に向けてきた視線と経済学を超えて発言してきた内田の声が記録されているということから、「生命・芸術そして学問」と副題が付けられ、内田の思想(人となりと作品＝業績をトータルに捉えたもの)への格好の案内書、入門書といえる。

ところで、こうした内田の取り上げ方は、一つの危険性をはらむのではないだろうかと考えられなくもない。マックス・ウェーバーは『職業としての学問』で、作者の「個性」や「経験」と「作品」は厳密に分けられるべきであり、職業として学問をする者は自分の研究分野に専念すべきで、安易に専門以外に発言したりするものではない、禁欲すべきであるとしている。また、社会科学、自然科学を問わず学術論文などは、専門的理解や評価にさらされるべきで、作者の「個性」や「経験」が入り込む余地はないとしている。自然科学や社会科学でも抽象度が高い分野であれば、ウェーバーが言う専門化や禁欲は理解しやすいと思われる。しかし、文学作品や芸術作品などになるとどうだろうか。作者の「個性」や「経験」は、「作品」を内面的により深く理解し、味わう助けとなるとも言われている。

内田の「個性」、「経験」と「作品」が紹介されている本書にウェーバーの指摘する危険性がないのか、また、内田の思想の中心である市民社会論がどのように紹介されているか、以下見ていこう。

1. 内田の人となり＝「個性」と「経験」

「内田義彦の生誕」(p.205-239)には、内田が1925年に御影尋常小学校卒業後、結核のため2年間の療養生活を送らざるを得なくなり、1934年に大学入学後も再度結核療養のため2年間休学していると記されている。結核は内田自身の問題であっただけでなく、内田の兄と姉5人、全員の命を奪っていた。1944年8月には佐世保海兵団に召集令状をうけ入隊したが、結核の既往症があったためであろう間もなく除隊となる。同年12月には治安維持法違反容疑で約4か月目黒碑文谷署に拘禁されていた。

そうした戦争中の心境を内田は、「ぼくの出発点は御存知の通り戦争中でしょう、・・・それにいつ死ぬか分かんような状況でしょう。生きている証がほしい。ふんばる 拠点を見出さなければということ、それが言ってみれば私の学問であつたわけです」(p.227-228)と語っている。

「ふんばる拠点」を求めている様子を友人の野間宏へ次のように書き送つてもいる。「おそまき乍ら素材そのものの直接的な交渉から常に出発する事の第一義的な意義と、同時に然し単なる感性的な把握に終る事なく、分析を常に中核に進めて行き一つの統一ある思想に到達する思惟の重要性とをはっきり悟りました。・・・本源的な(それ自身本質価値を持ち、それ無くしては凡そ学問も芸術も存在しない)物の感性的把握あるひは感情を自己否定的に一つの形式、一つの統一ある全体に高め凝縮させていく、と云ふ所に真の古典と云ふものがあると思います」。(p.228-230)

ここに、結核という個人の事情と戦争という社会の状況、その両方を引き受けなければならなかった内田に「ふんばる拠点」＝「生きる」力をもたらすものが「学問」であり「古典」であつたということが宣言されている。戦前の結核は、堀辰雄の『風立ちぬ』にもみられるように、死につながる病であつたから、患者に深い思索をもたらす契機にもなったであろう。結核を扱った作品が「結核文学」と呼ばれたことがあつたし、戦争体験者の「戦争文学」と言われるものもある。しかし、結核や戦争から「作品」が生まれると言えば、大きな誤解を生むだろう。作者の「個性」や「経験」だけが「作品」に直結するとはいえないし、結核と戦争は内田だけの「経験」ではなかった。だが、内田という「個性」や「経験」なくして「作品」がないのも確かである。

「個性」、「経験」、「作品」を情報というレベルに落とし込んだ場合、内田は次のように言う。情報の蓄積という観点から、「情報がはいった場合に、情報は情報としてだけわかるという変わり方と、Aという情報がはいることで、自分の、前に蓄積されていたものを分かり直すという、その二つの面があるだろうと思うんですね。・・・このへんのことはわりと平均化されて理解されているけれども、実際はシュパ〔ヌ〕ング〔緊張〕の関係にあるんじゃないかなと思うんです」(p.265—266) と言い、情報の受け取り方としては、「・・・このトンカツ屋は安いがうまいというのと、うまいが安いというのを分析すると、ある情報が入ることで突然・・・体験のなかにある要素が不意に強く出てきたり消え失せたりする・・・自分のなかの体験と称されるものもやっぱり断片、断片で、その断片がある連なり方をしている。その連なり方がちがったものになる・・・」。

少なくとも、読者としての内田にとって、「作品」を理解し評価するにあたっては、「作品」と「個性」・「経験」との間にある種の緊張関係を見ているようである。他方で、内田は研究者であり「作品」を生み出す作者でもある。専門分野での代表作『経済学の生誕』がどのように紹介されているかに移りたい。

2. 「作品」＝業績

1945年8月(内田は32歳)の敗戦の翌年に専修大学助教授就任とともに内田は社会的、文化的、学問的活動を活発化させた。発言は、時局の問題、日本資本主義やマルクス主義の問題など多方面にわたったが、34歳の時に発表した『潮流』論文(1948年)が批判される。

小野寺研太(社会思想)によると、『潮流』論文への批判とは、「内田は、生産力論が主張する産業構成の高度化は、近代的な技術を習得した熟練工の大量創出と前近代的な(職人気質の)労働者組織の変容をもたらし、結果的に戦中期日本の近代化を推進したと論じた。(しかし)・・・「反マルクス主義」的だと批判された。「正統派」からすれば、生産力論などは資本主義寄りの弁護論に過ぎなかったのだ」(p.90-91)ということであった。戦争遂行のための産業構成の高度化が近代的労働者組織の育成という意図せざる結果や効果を生むという論理は、アダム・スミスからくるものである。それが理解されなかったため、内田はアダム・スミスの研究に沈潜した結果、1954年に『経済学の生誕』がうまれた。

内田は次のように言っている。「その問題意識を一口で言えば、スミスが提出している市民社会の問題をすり抜けてもいけないし、スミスを野放しにしておくこともいけないということである。こうして出来上がったのが一風変わったスミス研究である『経済学の生誕』である。第一に、経済学の流れの中でスミスを考えずに、ホッブス、ロック、ルソーという市民思想の中から経済学がどうして出来上ったかを見る、第二に、市民的思想家スミスの積極面を出来るだけふくらませた上でマルクスと対置してみる、というのがこの本の視角になっている。経済学と社会諸科学(ないし、それを包む思想)との関係、また、市民思想と社会主義思想との関係をどうおさえるかは、爾後、私の研究の中心テーマになった」。(p.234-235)

後日、第一の視角は、1971年に出た『社会認識の歩み』で展開される。そこでは、近代西欧で社会科学が成立し展開をとげてきた歴史(経済学の誕生も含む)が、マキャベリからスミスまでの社会認識の変遷として描かれている。運命に立ち向かう、「賭ける」存在としての人間を押し出したマキャベリ、君主、

国王そのもの（市民社会のルール）を一度ご破算にして、国家制度の根本的な考察をしたホッブス、自愛心・自己愛と利己心の違い、他者への憐憫を言うルソー、利己心を一定の制度のもとで肯定するとともにルソーの憐憫を共感において踏襲するスミスというように。特に、スミスにいたって、機構のもとでの人間をみる、主体分析を行うことと、個々の人間の行動が織りなされて意図せざる結果を作り上げる経過なり結果を知る、客体分析を行うこととの二つの方法が用いられているとされている。

第二の視角は1966年に出た『資本論の世界』で展開された。まず、スミスは階級的搾取があるにもかかわらず富が一般化するのとはなぜかという問いを立て、分業による社会的生産力の発展をその回答とした。他方、マルクスは、社会的生産力の発展がなぜ貧困や恐慌を伴って発展するのかという問いのもとに、資本主義に独自の生産様式を明らかにしたとしている。独自の生産様式とは、一方で生きた労働を行う者が賃金労働者（二重の意味で自由—労働力商品の完全な所有という自由と生活手段や生産手段を持っていないという自由）として、他方で過去の労働の所有者・財産所有者が資本家（生産手段の所有者）としてあらわれ、市場で出会うことによって、労働の社会的結合が図られることだという。この資本と賃労働という生産関係の視点だけでなく、歴史貫通的な人間と自然との物質代謝過程（労働過程）、社会的労働過程の観点から、他の生産様式では見られないほどの分業による生産力の向上という生産力の視点もマルクスにあったと言う。

さらに、商品所有者として市場での平等な出会いは、スミスがすでに労働者も、資本家も、土地所有者も、一人一人何等の制限や特権もなく相対応する社会—商業社会という概念で提示したものであって、マルクスはスミスの商業社会の概念、市民社会思想を引き継ぐことで、資本主義の分析をより深めることができたとしている。

スミス研究から生まれた市民社会論は内田の思想の中心を構成しており、内田の「作品」の基調をなしている。「作品」は、主体たる「個性」にとって一つの客体であるだろう。「経験」は「個性」のものである限りでは主体の側に属するだろうが、「個性」と代謝関係にあるもの、またはその関係が結晶化したものとするとき客体の側に属するだろう。主体と客体それぞれを見つめようとするスミスの眼から見る「作品」と「個性」・「経験」の関係は、ウェーバーの視点とは違ったものではなかろうか。

おわりに

「市民社会の思想家」と山田にいわしめる内田の全体像（内田の思想）を理解するには、思想の中心にある市民社会論を外すことはできない。山田によると、内田が言う市民社会とは、「近代人は伝統社会から離脱し、自由・平等・独立の人格としてお互いに向き合おうと志しました。直観的共感だけに支えられているような親密空間とちがって、また、お互いに見知ったどうしの狭い共同体空間とちがって、近代社会では、見知らぬ同士が取引し、交流し、語り合い、理解し合わなければならない空間」（p.17）となる。そうした市民社会で「生きる」ということは、子供だけでなく大人も老人もが「育ちゆく」ものとしてであると理解するべきで、人が「育つ」ためには「学ぶ」こと「学問する」ことが必要だ。なぜなら、社会の中で、しかも一人の人間として自分らしく生きていくには、社会に「参加」し、「役割」を担い、「決断と

責任」をもって行動しなければならず、「決断と責任」には必ず「賭ける」という行為が伴うのであり、「賭ける」にあたって、客観的認識が出てくるのであって、学問的思考が必要とされる。また、人は言葉やその他の手段でお互いの考えを「伝え」あおうとするが、その際、概念や経験科学を通すことで客観的に伝えあうことができ、この点でも学問的思考とその表現が必要とされる。

このように、内田は学問的認識の生成＝主体の生成に重きをおいて市民社会論を展開しているが、これは、戦後の「主体性論争」（1946年1月の文芸誌『近代文学』での問題提起）を横目に見た内田なりの回答を示したものではないかと思えなくもない。

市民社会の概念は、これまで日本社会の近代化への議論の中で取り上げられてきたし、同時に市民社会の実在性、ユートピア性、理念性など様々な議論がされてきている。評者が関心のある近代化以前の日本社会や現代社会を考察するにあたって、内田の市民社会論からどのような新たな視点や分析を導き出せるかは、今後の課題となる。

『内田義彦の世界』と題された本書は、「個性」・「経験」と「作品」を安易に結び付ける危険性がないとは言えないものの、読者は、本書の断片、断片を繋ぎ合わせることで、内田の市民社会論をはじめとする思想、「内田の世界」へと易しく導かれることであろう。

注

引用文はすべて本書から取った。

引用文はすべて「」で表示した。（文中の「」等と重複する）

引用文末尾の（ ）内の p . * * * は本書のページ数を示す。